

恒例の都連映画上映会

オペラ映画

「エフゲニー・オネーギン」

Eugene Onegin

～チャイコフスキーとプーシキンのハーモニーをあなたにとどけます～

【日時】: 10月28日（日）

14:00～

【会場】: 世田谷区経堂 日ソ会館

【会費】: 500 円

【解説】: 舞台を離れて、ロシアの大自然の中で乙女心の一途な思いが切なく燃え上がります。タチアーナの「名の日」に歌う「トリケの歌」、決闘に赴く前に歌う「レーンスキイのアリア」、華やかな舞踏会など、見所、聞き所満載。チャイコフスキーの曲にのせてプーシキンの世界が広がります。

（日本語字幕つき、ロシア語）



主催：日本ユーラシア協会東京都連合会

作品解説

1876 年、チャイコフスキーはパリでビゼーの『カルメン』を観て、その身近な題材をベースに活き活きとした登場人物たちが織りなす悲劇に大きく感銘し、「自分たちと同じような人間」が登場するオペラを書くことを決意します。歌手エリザベータ・ラヴロフスカヤの薦めでプーシキン『エウゲニー・オネーギン』のオペラ化を計画し、1877 年 4 月、交響曲第 4 番のスケッチを完成させるや『オネーギン』の作曲に没頭します。しかし、チャイコフスキーの私生活は多忙を極め、アントニーナ・ミリューコヴァからの突然の結婚の申し入れ、結婚、悲惨な結婚生活、破局、自殺の企て、神経発作、海外療養、という一連の悲劇で作曲は一時中断します。その後ジュネーブ湖畔での静養に前後して始まったナデジダ・フィラレトブナ・フォン・メック夫人との文通により、精神的物質的援助を得てから健康と創作力を回復し、1878 年には交響曲第 4 番のオーケストレーションと平行して『オネーギン』を完成させます。

この曲は、当時のオペラの観念からは異なるために、チャイコフスキーは「抒情的場面」と呼び、初演は大劇場ではなく、モスクワの小劇場を選び、モスクワ音楽院の学生たちによって歌われました。しかし、皇帝アレクサンドル三世の命によりパテルブルグ帝国劇場で上演されて大成功を博するに及び、ロシアを代表するオペラとしての地位を不動のものにしました。

ロシアの国民的詩人と呼ばれるアレクサンドル・セルゲエヴィッチ・プーシキン(1799-1837)は、帝政ロシア末期において文学が社会の精神的発達の上に重要な役割を果たす国民的な事業であることを自覚した、最初のロシアの詩人でした。国民のことばに基づいたロシア写実主義文学の確立者でもありました。しかし、専制政府におもねることなく自らの芸術の独立を守りつづけたプーシキンは、その不屈な態度をにくむ人たちのしくんだ陰謀のなかに、決闘によって命を落とします。絶世の美女と謳われた妻をめぐって近衛将校と勝ち目のない決闘に散ったとされていますが、「詩人の口に封印」をするため、皇帝の後押しを受けて殺人が仕組まれたものといわれています。この作品の中で詩人のレンスキーがオネーギンとの決闘で命を落とすことと奇妙な符号を見せています。代表作はこの『エフゲニー・オネーギン』(1831)の他に、『ボリス・ゴドノフ』(1825)、『スペードの女王』(1833)がありますが、いずれもオペラ化されていて、しかもロシア・オペラを代表する作品になっています。

この『エフゲニー・オネーギン』でプーシキンはロシアの 2 つの典型的な人物を描いていることに注目されます。まずは「オネーギン」、高い教養と才能を持ちながらそれを活かす場所を都市にも農村にも見出せず、現実社会に背を向けて「ニヒル」で「デカダン」な「余計者」として無為な生活を送る帝政末期の貴族として描いています。こうした人物はレールモントフのベチョーリン、ゲルツィンのペリトフ、ゴンチャロフのオプロモフ、ツルゲーネフのルージンへと受け継がれ、19 世紀ロシア文学の潮流の先駆けとなります。一方の「タチヤーナ」は、外面の素朴さにもかかわらず、高い道徳性と激しい愛情を内に秘めるこの女性として、ツルゲーネフの『その前夜』、トルストイの『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』、ゴロキイの『母』など、その後のロシア文学の中で発展を遂げた女性像の原型となっています。

なおプーシキンは、オネーギンを一典型にまで高めた同情の涙を持って取り扱っているに対して、チャイコフスキーは彼を冷血漢として憎み、題名にも関わらずタチヤーナを主人公として取り上げ、克明な心理描写から彼女のあらゆる感情の陰影を慈しみながら描いているところが興味深いところです。



作品あらすじ

帝都ペテルブルクの華やかな社交界で放蕩三昧の生活を送ったオネーギンは、若くしてあらゆる事に飽きがきてしまった。田舎の領地に移り住んだオネーギンは変人として誰とも付き合えなかったが、近くの地主で若き詩人レンスキーとだけは気が合った。

レンスキーにはオリガという婚約者がおり、レンスキーと共にオリガの家を訪ねたオネーギンはオリガの姉タチヤーナと出会った。聡明だが内気で空想好きな文学少女タチヤーナはたちまちオネーギンに恋をしてしまい、想いを胸に秘めておく事ができずにオネーギンに自らの恋を打ち明ける手紙を書いた。しかしオネーギンはタチヤーナの気持を慇懃無礼に拒否し、その洗練されない子供っぽさに説教までした。

間もなくタチヤーナの名の日の祝いが開かれたが、社交嫌いの上にタチヤーナのしおれた様子にますます不機嫌になったオネーギンはレンスキーを怒らせて気晴らしをしようと、舞踏会の間中オリガをレンスキーから取り上げて恋をささやくふりをした。オリガもオネーギンにのせられてすっかりいい気になってしまった。

自分の思い描く純粋な理想を踏みにじられたレンスキーは激高し、オネーギンに決闘を申し込んだ。オネーギンは動揺したが心ならずも決闘を受けてたち、レンスキーを撃ち殺してしまった。

良心の呵責に苦しむオネーギンは旅に出た。オリガはレンスキーの死を嘆いていたが、生命力あふれる彼女はやがて他の男の愛を受け入れて結婚し、遠くへ行ってしまった。一人残されて孤独に沈むタチヤーナはそれでもオネーギンへの想いを断ち切る事ができず野原をさまよい、オネーギンの留守宅を訪ねてその蔵書の中に彼の人となりを見出していた。

母親のラーリナ夫人はそんなタチヤーナが婚期を逃すのを心配して、縁を求めてタチヤーナをモスクワの花嫁定期市へ連れて行くことにした。

数年後オネーギンは旅にも飽きてペテルブルクの社交界に戻ってきたが、そこで今は公爵夫人となって人々の尊敬を受けるタチヤーナに再会した。オネーギンは彼に会っても動揺もみせず気品と節度ある態度を保つタチヤーナに恋をしてしまい、想いを打ち明ける手紙を書くが、返事はなかった。

一冬中恋に悩み続けたオネーギンは春の訪れと共に自分を押さえ切れなくなってタチヤーナを訪ね、社交界での仮面を脱いだ素のままの彼女と出会い、その本心を知る事となった。タチヤーナの心は昔と少しも変わっておらず、今も彼を愛していた。…しかしもうすべては遅すぎる、自分は人妻なのだ…と言って、タチヤーナは永遠にオネーギンから去って行った。

